

2024年度 第3回研修会

★日時・研修地

2024年 9月 15日(日) 東近江市蛭谷町・木地師やまの子の家周辺

★日程&行程

近江鉄道八日市線 八日市駅集合 午前9時35分 乗用車に分乗して蛭谷へ

新博物館構想のある「木地師やまの子の家」周辺を散策し、冷温帯や中間温帯に生育する植物を観察。やまの子の家での昼食後、蛭谷町の「筒井八幡神社」にある「木地師資料館」を見学し、その後解散。

★参加者 高橋 小西 水田 森上(報告書担当) 計4名

当日は、雨の予報が出ており、雨対策も持参で研修にのぞみましたが、最後まで雨が降ることはなく、連日の厳しい残暑から、少し解き放たれての活動となりました。ただし、「ヤマビル」の活動は引き続き活発で、足下のガードをしていますが、かまれてしまうほどでした。



左の「木地師やまの子」は、宿泊も可能な研修施設です。こちらの駐車場に車を駐めさせていただき、周辺の観察後、お昼ごはんもこちらで食べさせていただき、お世話になりました。

ここで、7月に「木地師文化フォーラム」が開催されました。昨年参加したのですが、参加者は、全国レベルで、木地師が日本中に広がっていった歴史を実感しました。



ミカン科:カラスザンショウ
背丈の低いのが珍しいです。



湧き水が勢いよく出ていました。冷たくて、気持ちいい！！

「木地師やまの子」の施設周辺



キンポウゲ科:センニンソウ
白い綿毛が伸びてくると、仙人草らしく



タデ科:イタドリ

雌雄異株 花弁無し 萼片 5 枚

上:雌花

右:雄花・・・おしべが萼片の間から飛び出すように長く発達。



カバノキ科:クマシデ

たくさんの実をつけていました。



フウロソウ科:ゲンショウコ 実際に効く証拠→「現の証拠」

花の色 紅色:日本海側 白色:東日本 淡紅色:西日本が多い傾向 ドクダミ・センブリと共に日本三大民間薬



ビャクダン科:ヤドリギ (雄雌異株)

実をみつけ! キレンジャクなどに食べられて、遠くに運ばれる。



キク科:スズカアザミ

三河地域から鈴鹿山脈に分布
日本固有種

総苞片が、やや反曲する。(ネット無料画像より)

粘り気もある。





シソ科:レモンエゴマ
葉をもむと、レモンの香り



イラクサ科:アオミズ
茎がみずみずしく、草全体が緑色



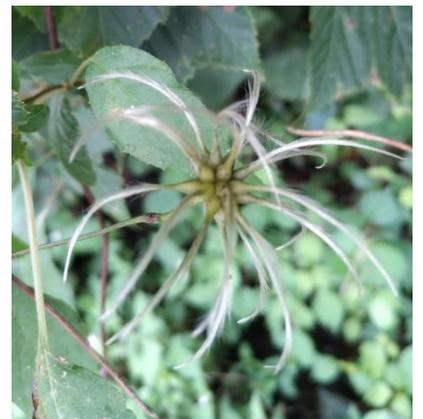
イラクサ科:アカソ
カラムシやヤブマオと同様、衣服の植物繊維の材料。



ガマズミ科:ゴマギ
葉をもむと、ごま油の香り



キンポウゲ科:ハンショウヅル
葉が三出複葉



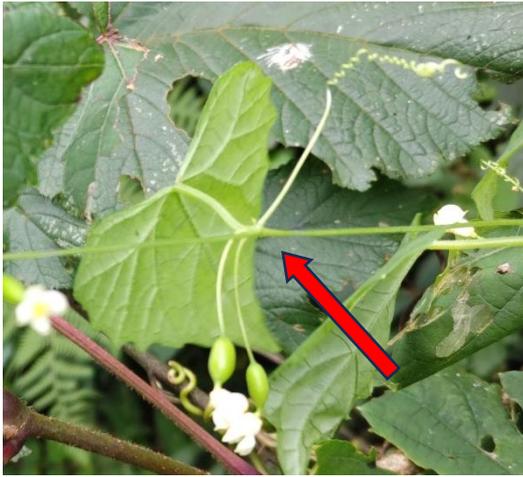
ハンショウヅルの実



サトイモ科:オニドコロ(鬼野老)
ヤマノイモのように、ムカゴはできない。有毒。
種子には、翼があり、片側に張り出した形になっている。



ムカゴのできた、ヤマノイモ



ウリ科:スズメウリ

星形の雄花
下部の子房がふくらんでいる雌花

葉と対生する、細い「巻きひげ」を伸ばして、つかまりにいく。



オミナエシ科:オトコエシ(男郎花)
女郎花よりも、茎や葉が大きい。
花の色も黄色ではなく、白色。



アカバナ科:アカバナ
めしべの先が、棍棒状。
イワアカバナは、球状。



アカネ科:アカネ
根が赤いことから。茎の断面が四角形



イネ科:コブナグサ 左側は、花 葉が、鮎に似ている。
黄色の染料に→「黄八丈」にも 使われる。



アカネ科:ハシカグサ
アカネ科の中では、小柄。



ツツジ科: ホツツジ めしべが外に突き出している。
細い枝が、簀や蓑に使われてきた。有毒物質を含む。



ナデシコ科: ナンバンハコベ 南蛮というが、在来種。異国風なため、
名付けられた。花卉が途中から反り返る。実は、黒色に熟す。

ツリフネソウ科: ツリフネソウ
帆掛け船を吊り下げたような形。
あるいは、花器の釣船に似ている。



コマカンソウ科: コバンノキ
まるで、複葉に見える小枝を
出す。

マメ科: ノササゲ 花の色から、キツネサ
サゲとも。同じ黄色の花が咲く、「タンキ
リマメ」や「トキリマメ」よりも葉が細い。



カヤツリグサ科: ミヤマシラスゲ



キキョウ科: ツリガネニンジン



実ができてつあるところ。



アジサイ科: クサアジサイ 草本
装飾花は、花弁状の萼片が 3 枚。



ユリ科: ヤマジノホトギス
花被片は、上部が水平に開く。



クスノキ科: ダンコウバイ
冬芽をつけていました。



アワブキ科: ミヤマハハソ
「ハハソ」は、コナラのことで、葉が
コナラに似ている。



マメ科: ユクノキ 豆果ができていました。



ムクロジ科
ウリハダカエデ
の実

「筒井八幡神社」に隣接する「木地師資料館」



「手挽きロクロ」

材料を求めて山中を移動したため、移動に便利な「手挽きロクロ」を先祖代々使用してきたそうです。
綱を引っ張ってロクロを回す人、カンナで製品を仕上げている人と分担して作業を進めます。



ねじキャップ式の万年筆は、「足踏みロクロ」を挽いて、溝をつけたそうです。現在は、製作されていません。



「こけし」作りは、木地師から派生したそうです。

県外の木地師の方が、木地師の発祥のこの地を訪れる際、(こちらでは、帰ってこられると表現されています。)自分自身で作られた「こけし」を奉納されてきたそうです。これは、たくさんある中の一部です。



室町時代から伝わる能面。木地師発祥の地だけに、木地師が面打ちも手がけたのではないかと説もあるそうです。現在も祭礼の際に、使われているとのこと。

野外・資料館と、たくさんの学びがあり、わずかに咲いた彼岸花にも出逢え、充実感いっぱい、帰路につきました。